

論 說

學 術 用 語 に つ い て

福 田 武 雄

およそ言葉というものは、自分の考えを他人に、また廣く世間一般に伝えるためのものであつて、特に、複雑な概念を有する問題を論議したり、精細な點について意見を表明する必要のある科學の分野においては、おたがいに使用する言葉の意味が、おたがいにはつきりと了解されていなければならない。また學問の進歩とその正しい普及にとつても、用語がみんなによく了解され、しかも正しく了解されることは、きわめて重要なことである。

從來わが國で用いられていた用語、とくに工學用語は、西洋の學問の移入時代に、先輩たちがその豊かな學識を傾けられ、たとえば、呎、吋、糶、耗、馳、鋌、腺、粹などの新字を考案されるなど苦心をして考え出されたものであるが、なかなか難解なものも多く、また、人により、分野により、同じ事物に異なつた用語が使われていた。このような用語を整理統一し、また、わかりやすくしようとする試みは、大分昔から考えられたのであるが、工學方面でともかくもまとまつた成果が上つたのは、昭和6~14年の間に、資源局資源審議會でまとめた藥品、機械、電氣、土石鑛物類などの標準用語である。この標準用語を議論している間に、専門がちがう分野の用語を統一する必要が痛感せられたため、昭和6年に、日本工學會に所屬學協會から委員が出て用語統一調査委員會が設けられ、2學會以上に共通な重要な用語の統一事業に乗り出した。筆者も、この委員會の委員に列してから現在まで、約20年近くになるが、どうしたことが用語といへばいつでも引張り出されるようになり、本文もまた本誌編集子の依頼により筆をとつた次第である。

工學會の用語は、昭和14年に「工學共通用語集」として3793語が公表されたが、その中でも、「曲げモーメント」、「引張應力」、「壓縮應力」などの應用力學關係用語は、すでに工學的常識とさえいえるほど一般に普及し、今では「彎曲率」、「應張力」、「應壓力」などといつても通用しないぐらいになつた。

資源局の標準用語と工學會選定の用語とで、一應は工學用語の基本は定まつたと思つているうち、第二次大戦が起り、今度は技術動員の關係から、技術院の主張により、當時の全日本科學技術團體聯合會で再び用語の整理統一事業がはじまつた。この時の特徴の一つは、今から考えれば笑うべきことであつたが、外來語（特に英米系のもの）は、なるべく國語でいいあらわすことであつた。螢の光その他當時の敵國側の音樂を公開の席上で演ずることが禁止され、野球やゴルフの用語もすべて國語でいいかえようとした時代であつたから、やむを得なかつたが、ポアソン比を「橫縮比」

第 4 卷

3 月 號 目 次

第 3 號

論 說

學術用語について.....福 田 武 雄... 1

研 究

衝撃波管.....玉 木 章 夫... 3

文部省 A 型鐵筋コンクリート造
モデル校舎の標準構造設計.....坪 富 井 善 勝... 9

超音波の映像.....鳥 根 鋼 安 生... 13

結晶格子轉位と初期クリープ
—および疲勞破壊に關して.....谷 神 安 正... 18

同聲同期の聲帶觀察用
ストロボスコープの試作.....藤 系 小 岡 川 建 夫... 23

調 査

放射性同位元素の工業への應用.....加 藤 正 夫... 26

海外研究報告 — 3 —福 田 武 雄... 32
レンセリア工醫大學・イリノイ大學工學試驗所

速 報

5 溶鐵スラッグの起電力.....松 下 幸 雄... 8

6 振動容量電位計の直視化.....中 田 一 郎... 25

生研ニュース・編集後記..... 34

アルキメデスの原理を「浮力の法則」というように苦心したものである。しかし「レコード」を「音盤」としたことは、今から考えてもむしろよい譯語であると考えられる。また、ビタミン A, B, C 等をエー、ビー、シーと發音するのはよくない、アー、ペー、ツェーにすべし（當時わが國はドイツと同盟していた）などの愚論も出た位であるが、幸か不幸か、終戦とともに全科技聯で定めようとした案はうやむやになつてしまつた。

終戦後は、當分の間は用語改訂のことなどは起らないと思つていたところ、再びその必要が生じてきた。その最大の原因は、昭和 21, 22 年に内閣から告示された當用漢字と現代かなづかいとである。このために、一應は普及した工學用語のみならず、一般の學術用語をも、當用漢字および現代かなづかいの線にそつて改訂する必要が生じ、そのため昭和 22 年に學術研究會議の學術文献調査特別委員會に學術用語調査研究會が設けられ、これは後に昭 24 和年に文部省の學術用語調査會に吸収せられ、さらに學術獎勵審議會學術用語分科審議會に改組せられて現在にいたつている。今回の審議會の特徴の一つは、従來からの工學または自然科学の領域から發展して、人文科學をも含む學術全分野の用語を對象としたことである。この審議會では、各専門分野ごとに専門部會を組織し、それぞれの分野の用語を採録しその制定原案を作り、部會間の調整、世論調査の後、最終的に制定して公表する豫定である。現在はまた制定の域に達していないが、機械關係、化學關係では、一應の制定案が印刷出版せられ、世論を調査している。

中國から傳來した漢字は、わが國の國語の内容を豊富にし、わが國の文化の興隆に資したのであるが、一方、難解な漢字は學校教育に重大な負荷を與え、學術の進展と科學の普及に多大のさまたげとなつていくことはいうまでもない。このため大正 12 年の常用漢字、昭和 17 年の標準漢字、今回の當用漢字などが定められたのである。合計 2 萬字以上もある漢字の中から、日常讀み書きする漢字を一定數に制限することには、主旨としては何人も異論はないであろう。問題はその定め方である。前記の資源局の標準用語および工學會用語では 2669 字の標準漢字によつたのであるが、工學上必要とする漢字の大部分が含まれていたので、用語選定上大して不便はなかつた。しかるに今回の當用漢字 1850 字では、實に思いがけない困難に當面したのである。

それは、われわれが日常使用する漢字の多くが除外せられたからである。當用漢字表を見ると、たとえば、虜、鷹、嚇、殉、拷、慌、慘、寂、愁、陰、鷹、款、翁、隸、麗、龍、閨、琴、鼓、棋、碁など日常的には無くてもすみそうな漢字が多數に含まれているにもかかわらず、桁、梁、棧、灌、漑、洪、溢、渠、錐、燐、冶、銕などが省かれており、魚へんでは「鮮」と「鯨」だけであるのはまだしも、日常使用する鍋、釜、皿、瓦、釘もなく、また人の一生の四分の一はヤッカイになる「枕」の字もない。

このような當用漢字に直面して、われわれは、適當な漢字でおきかえたり（例：拋物線を放物線に、車輛を車兩に、共軛を共役に、溢流を越流に）、いかえたり（例：收斂を收束に、渦動を渦運動に）、外國語そのままを使用したり、カナ書きにしたりして苦心を重ねている。上記のうち、カナ書きにする場合にはいろいろの問題が生じてくる。たとえば「油砥石」は「油と石」になるが、これでは oil and stone か、oilstone か區別つかないし、「鐵冶金」も「鐵や金」とすると iron and gold と區別がつかない。それで、用語中のカナはすべて片カナで書くことにし、たとえば「油トイシ」、「鐵ヤ金」とすることによつて、ともかくも上記の混亂を防ぐことにした。それにしても、このようなカナ書きはなるべく避けたいものである。われわれは、「轉轆器」を「轉線器」、「浚深船」を「ドレッジ」、「剪斷」を「ズレ」などのようにいかえる案を一應決定したのであるが、すべていわゆる専門家の方から苦情が出て、「轉テツ器」、「シエンセツ船」、「セン斷」などのようにカナ書きにすることになつた。これらのカナのもと漢字を知つているわれわれにとつては、これで不便もないのであるが、これらの漢字を學習しないであろうと思われる兒童や次の時代の人にとつては、意味のない用語になりやしないかと心配される。

當用漢字は、以上のように、學術用語に對し多大の不便を與えているが、他方、この漢字制限のために従來の難解な漢語的用語が一舉にして解決された例も少くない。たとえば、隧道(ツイドウ)をトンネル、堰堤をダム、唾壺(ダコ)をタンハキ、欠伸(ケンシン)をアクビ、吃逆(キツギャク)をシャクリとしたなどである。

用語制定にあつて世論を無視しては、實際に使われ得る用語を得ることはできない。學術用語としてのステーブルファイバは、こういつたのでは一般には通用しないが「スプ」といえば子供でもわかつてくれる。法律でいう「寫調」は「録音」でなければ通用しない。「自轉車競争」はいつしか「競輪」となり、材料としての「ゴム」に對しチューインガムを「ガム」といい、現代流行の「パチンコ」も、實に感じの出ている言葉だと感心する。

實際に廣く使われ得る用語を定めるには、公式論や一人よがりではとてもできない。用語に少しでも關心をもたれる諸士より、何なりとも御教示、御忠告を望んで本文を終ることにする。

(本文の原稿は當用漢字で書いたのであるが、印刷に使われた活字は、旧來の字体で、當用漢字として定められた字体ではない。) (26. 12. 21)